

情報なんて「クソクラエ！」だ

元関西外国語大学教授
金谷 信之

この雑文は、朝から晩まで「情報」「情報」「情報」・・・「それコンピューターだ」「それインターネットだ」「それインフォメーションだ」・・・と苦しめられ、悩まされ、夜は夜として情報のオバケが夢の中に出てくる人たちへ。そして、「エイ、情報なんてクソクラエだ」「情報なんて、^{なます}鱧斬りにして三途の川へ叩き込んでやりたい」と思っている人たちに捧げるバラードである。いや、レクイエムかな？

1. 情報は多ければ多いほどよいわけではない。

情報なんてものは実体ではない。云うならば影法師みたいなものだ。だから、いくらでも多ければ多いほど良いと云うものではない。情報が多いと云うことは、孫悟空の分身の術に惑わされているみたいなもので、本当の孫悟空がどこにいるのやら、却ってわからなくなる。



映画『羅生門』の一場面

©大映



図1 映画『羅生門』の一場面
写真は多襄丸(三船敏郎)と真砂(京マチ子)
左は羅生門のDVDのジャケット(発売元:ジェネオンエンタテインメント, 税込定価: ¥4,700)

黒沢明監督の映画『羅生門』(1950年、大映)は、芥川龍之介の小説『藪の中』を原作とする映画で、公開の翌年にはベネチアの国際映画祭でグランプリを受賞して世界的にも知られる名作である。早坂文雄の音楽とモノクロームの画面とは人間の心の深淵を描き出しているが、それらもさることながら、この映画は、情報が幾らあったところで真実というものは判らないのだと云うことを語ってもいる。(以下、詳細は原作『藪の中』の記述にもとづく。)

時代は平安末期。若狭の国府の侍である金沢武弘(配役は森雅之)は、妻真砂(京マチ子)を伴って、京を立ち若狭へ向かうべく東海道を下り山科の駅を過ぎた頃、多襄丸という盗賊(三船敏郎)とすれ違う。多襄丸は行き違いに見た真砂の美しさに惹かれ、この女を奪いたいと心に思う。そこで、古塚を暴いて手に入れた財宝を藪の中に埋めてあるが買わないかと、武弘を言葉巧みに藪の中に誘い込み、そこで、不意に組み付いて大木の根本に縄で縛り付け、口の中に竹の落葉を頬張らせて口を利けなくした上、その目の前で女を手込めにして犯す。

翌朝、男は死骸となって木樵(志村喬)に発見されるが、女は行方が分からなくなってしまう。一体そこで何が起こり、何があったのか。三人の当事者の語るところは、すべて食い違っている。真相は最後まで遂に判らない。

(い) 多襄丸が検非違使に捕らえられて自白した話
犯した女は気違いのように俺の腕に取りすがり、「二人の男に恥を見せたのは死ぬよりもつらいから、二人で決闘してくれ。勝った方の妻になる」と云う。そこで、男の縄を切り太刀で斬り結び、遂に男を斬った。しかし、その時、女はどこへ逃げたのか、どこにも居なかった。

(ろ) 真砂が清水寺に来て観音菩薩の前で懺悔した話
私を手込めにした後、盗賊は去ってしまう。しかし、その時、夫の目に私に対する冷たい蔑みの

光を見た。私は「こうなった上は貴方と一緒に居られない。どうか一緒に死んでくれ」と云い、小刀で夫の胸を刺し自分も喉を突こうとしたが、死にきれなかった。

(は) 武弘の死霊が巫女の口を借りて語った話

盗賊は妻を手込めにした後、自分の妻にならぬかと妻を口説いていた。遂に妻は応諾すると「あの人が生きては、貴方と一緒になれぬから、あの人を殺してくれ」と云う。それを聞くと盗賊は妻を蹴り倒し、私に「あの女を殺すか、それとも助けてやるか」と尋ねる。その言葉に妻は走り去った。盗賊は私の縄を切って去っていった。そして、私は落ちていた小刀を我が胸に突き刺した。

2. 情報を知っているばかりに命を落とすこともある。

情報は多いほど良いと云うものではない。いや、多い少ないの問題どころか、そもそも情報を持っていること、情報を知っていることが、命取りになることだってあるのだ。

平家物語の第十巻、藤戸合戦の段。時は寿永3年(1184年)、一の谷で敗れた平家は、四国讃岐の屋島に本拠地を移した。9月、三河守源範頼は3万騎の騎馬軍団を率いて西国に発向する。他方、屋島の平家は、新三位中将資盛に500艘の兵船を率いさせ、瀬戸内対岸の児島に軍を送る。児島は今では陸続きの半島になってしまっているが、当時は独立した島で、本土との間は幅約5町(500m)ばかりの水路によって隔てられ分離していた。その水路が藤戸。

範頼の軍は水路を隔てた西河尻に到着して陣を敷く。しかし、船がないので児島に抛る平家軍を攻めることができない。それを見て平家は、小舟を出しては源氏の兵たちをからかって挑発するが、源氏方はどうすることも出来ず歯がみするばかりだった。

ここに、源氏の軍の中に佐々木三郎盛綱と云う者がいた。彼は地元の漁師の若い男に、馬でも島へ渡れるような浅瀬はないかと訊ねる。男は盛綱に浅瀬を教え、更に夜闇に紛れて盛綱と二人で裸になって浅瀬を渡ってみる。しかし、その帰途、盛綱は物も云わず男を刺し殺し首まで掻き切つて



図2 佐々木盛綱像
倉敷川(岡山県倉敷市)にかかる「盛綱橋」には、馬で浅瀬を渡る佐々木盛綱の像が置かれている。

しまう。このような男はどちらに着くか分かったものではない。浅瀬を通って攻め込もうとすることを平家方に喋らないとも限らないと云う思いと、もう一つには、味方の者に同じように浅瀬を教えたのでは、自分が一番槍の功名を手にするには出来ないとの思いによるものである。とは云え、残酷。

翌朝、平家方は、今日も小舟を出して源氏の兵をからかい始めた。佐々木盛綱は家の子郎党七騎と共に、昨夜漁師の男から聞いた浅瀬に馬を乗り入れる。総大将の範頼は「あいつ気が狂ったか」と、土肥次郎実平を走らせ、おし止めようとするが、実平も盛綱の後に従って海を渡る様子。それを見て、「さては浅瀬があったのか」と三万余騎が後に続き、忽ち、源平入り乱れての激戦となり、夕刻に至ると島は完全に源氏の兵馬で制圧されて、平家は船で屋島へ逃げ帰る。

かくて盛綱は「川を馬で渡って一番乗りする話が多いが、海を馬で渡って一番槍した話は古今東西前代未聞きいたためし、希代の例」と頼朝に激賞され、備前の児島を所領として賜る。

世阿弥の謡曲『藤戸』はこの話の後日談で、殺された漁師が幽霊となって出てくる。しかし、化けて出たところで、恩を仇で返されたこの不条理な死の恨みは晴らせるものではない。

かくて情報は必ずしも有り難いものではない。人を殺すことさえあるのだ。情報なんて「クソクラエ」だ。